Vent

音楽教育 ヴァン

vol. 59

巻頭インタビュー

ダイアモンド✡ユカイ

歌に込めた思いと魂

レポート①

子どもたちの学びに寄り添うアウトリーチ

赤塚小学校×東京フィルハーモニー交響楽団の
メンバーによる弦楽四重奏

レポート②

心に残る音楽体験を

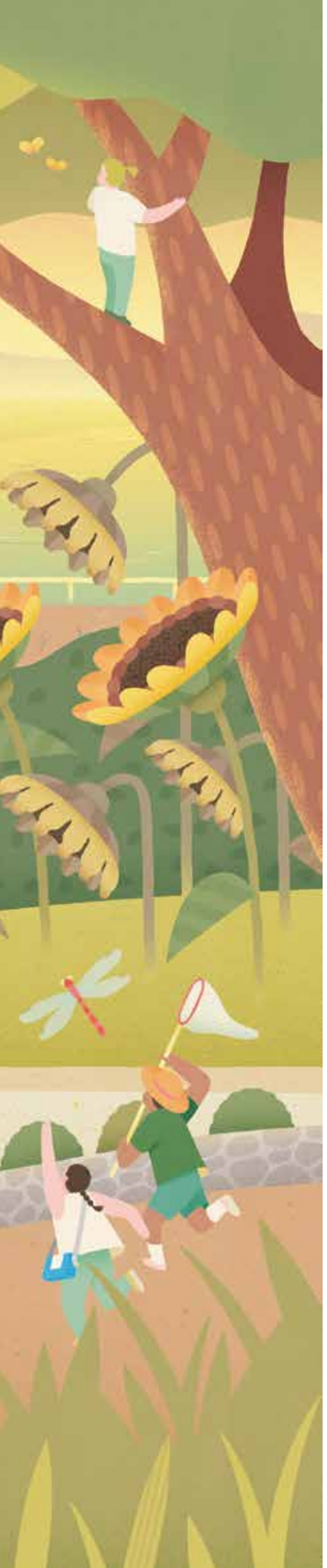
木原健太郎さんと湖畔小学校の児童による
「ツナガル“音の環”プロジェクト」

参考楽譜

『for your brightness』

（作詞：Sora 協力：青陵中学校 平成26年度生徒会 作曲：木原健太郎 編曲：アベタカヒロ）

KYO-GEI



子どもたちの「今」という瞬間のために

競技で優勝するため、コンクールで金賞をとるためなど、少し先の未来の目的を達成するために、「今」という時間に行われる練習は厳しくても耐えるというような考え方がある。アメリカの社会学者のタルコット・パーソンズは、このような考え方を「インストゥルメンタル（道具的）」と呼び、未来の目的を達成するために「今」という時間を犠牲にしていると捉えた。その対義語は「コンサマトリー（自己充足感）」である。「今」という瞬間を楽しみ満足できるようにする（プロセス的な行為そのものを楽しむ）という意味で、これはパーソンズの造語である。

さて、昨今の学校教育に関わる改革に目を向けると、学習指導要領の改訂や、部活動の地域展開に関わる論議が活発化している。未来の社会に向けて、そして子どもたちの未来のためにどうあるべきかという視点からの論議が展開されがちであるが、それに加えて子どもたちの「今」という視点をもつことは極めて大切である。「コンサマトリー」の視点である。

ところで、「音楽」とは、時間の流れとともに、ある瞬間に音が発せられ、その音はすぐに消える。そして次の瞬間に新しい音が発せられ、その音もすぐに消える。しかし、その連続により、一つの美しい音楽が奏でられる。「コンサマトリー」とは、今という瞬間を充実させ、その連続により、豊かな人生を奏でていくというイメージであろうか。「音楽」と「人生」は似ている。教育関係者は、子どもたちと共に今という瞬間を純粋に楽しんでもよいのではないだろうか。音楽を奏でるように。

齊藤忠彦（信州大学 教授）

Contents

3 | 巻頭インタビュー
ダイアモンド✡ユカイ（ロック・ヴォーカリスト）

8 | 授業者に訊く
橋本武士（学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校 芸術科教諭）

14 | レポート①
子どもたちの学びに寄り添うアウトリーチ
赤塚小学校×東京フィルハーモニー交響楽団のメンバーによる弦楽四重奏

18 | レポート②
心に残る音楽体験を
木原健太郎さんと湖畔小学校の児童による「ツナガル“音の環”プロジェクト」

22 | Kyogei Presents
音楽診断
［第24回］ジャズ“超”入門編（監修・解説：小沼純一）

24 | Information

26 | 参考楽譜
『for your brightness』
（作詞：Sora 協力：青陵中学校 平成26年度生徒会 作曲：木原健太郎 編曲：アベタカヒロ）

34 | エッセイ
新・音から広がる世界［第19回］藤原道山

＊本誌に記載されている職名は令和7年8月現在のものです。

巻頭インタビュー

歌に込めた思いと魂

ロック・ヴォーカリスト　ダイアモンド✡ユカイ

聞き手　ヴァン編集部

今号の巻頭は、ロック・ヴォーカリストのダイアモンド✡ユカイさんのインタビュー記事です。2025年はユカイさんがヴォーカルを務めるバンドのRED WARRIORS（レッド・ウォーリアーズ）が40周年、ソロデビューは35周年というそれぞれの節目を迎える年になります。音楽活動の他に俳優やタレントとしても幅広く活躍されるユカイさんに、音楽とご自身の子育てについて、さまざまに語っていただきました。

ビートルズから教えてもらったことは、
自分にとっては「音楽」というよりも、
ロックという「楽しいもの」だったんです。

きっかけはビートルズ

Vent（以下、V）：ユカイさんはロック・ヴォーカリストだけでなく俳優やタレントとしても、多岐にわたってご活躍されています。子どもたちに親しまれている映画『トイ・ストーリー』の主題歌『君はともだち』を歌われていることでも有名ですが、ユカイさんご自身は、どのような子ども時代を過ごしていたのですか？

ユカイ：小学生の頃は、野球やサッカー、水泳、なんでもやるスポーツ少年でした。部活はずっと野球部に入っていました。

V：音楽に興味をもったのはいつ頃ですか？

ユカイ：自分で歌ったり演奏したりするようになったのは、中学２年生です。

V：何かきっかけはありましたか？

ユカイ：部活中、デッドボールを受けて足を骨折したことが始まりでした。骨折を気にせず部活を続けていたら悪化して重症になり、１年ぐらいスポーツができなくなっちゃって。自宅で過ごしていたある日、１人の友達が「暇だろ、これ聴きなよ」と、たくさんのレコードを抱えて家に来たんです。

V：たいへんでしたね。貸してもらったのは、どのようなレコードですか？

ユカイ：歌謡曲全盛期だったのですが、友達が持ってきたのは洋楽でした。当時は俺ね、スポーツ少年だったから長髪は嫌いだったんですよ。でも友達が持ってきたレコードは、クイーンとか、エアロスミス。

V：みんな長髪ですね（笑）。

ユカイ：そう（笑）。だけど、ある１枚を聴いたら稲妻が走っちゃったんです。ビートルズの『プリーズ・プリーズ・ミー』というアルバムでした。

写真提供：ダイアモンド✡ユカイ

V：どのような印象を受けたのでしょうか？

ユカイ：まず第一に、楽しそうだった。リズムや音楽の躍動感が心地よくて、聴いていると体が弾んでくるんです。自分にとってロックの原点はジョン・レノンの声です。「歌って、こんなに気持ちよさそうに歌えるんだ」と衝撃を受けました。

V：ビートルズとの出会いがロックに興味をもつきっかけとなったのですね。

ユカイ：当時、「男の子は、音楽をやらない」といった偏見があったので、最初は音楽をすることに抵抗はありました。でもやはりギターがほしくて、母に頼むと買ってきてくれて。ただそれがガット・ギターで、ほしかったエレキ・ギターとは違う（笑）。それでも近所のお兄ちゃんに習いながら、毎日学校から帰ってきてはギターを弾いて歌っている。そんな中学２年生でした。

V：それまでに音楽に触れる機会はありましたか？

ユカイ：ありませんでした。楽譜も読めなかったし、あの時代の学校で習う音楽は気難しいものでした。だから、ビートルズから教えてもらったことは、自分にとっては「音楽」というよりも、ロックという「楽しいもの」だったんです。

V：ギターを始めてから、記憶に残る体験があれば教えてください。

ユカイ：中学校の発表会で、ギターを持って１人で英語でビートルズを歌ったことがありました。歌い終わると一瞬みんながしーんとしたあと、「うわあ！！」って大喝采もらっちゃって。「なんだこれ、すごいな。歌って演奏して楽しいし、みんなも喜んでくれるんだ」と思ったら、どんどん夢中になりました。もうね、登り詰めていくしかないって決めたんです。

ハートビートに従って

V：バンドに取り組んだのはいつからですか？

ユカイ：高校に入学してから同級生とバンドを組みました。自分でいろいろ調べつつ、仲間と練習することで少しずつ音楽のことを知っていきました。

V：その頃から、ヴォーカルも担当されていたのですか？

ユカイ：はい。歌うことが自分のいちばんの得意技でしたから。実は楽器はね、何でもよかったんです。ベースを弾いていたこともありましたし。でもあるときローリング・ストーンズのかっこよさを知っちゃって「これだ」と思って、ベースは友人に任せました。

V：ローリング・ストーンズのどのようなところに惹（ひ）かれたのですか？

ユカイ：演奏全体が歌のように聴こえるところです。ローリング・ストーンズの音楽にはジャズからくるスイングの要素があるんです。リズムがハートビートなんだよね。

V：今のほとんどのポピュラー音楽には、デジタルの要素が取り入れられていますが、その点をどうお考えになりますか？

ユカイ：時代の変遷をたどると、デジタルの音楽が出来上がってきたのは1980年代です。キーボードが万能な楽器になり、マニピュレーター[1]が出てきた頃。イエロー・マジック・オーケストラ[2]がテクノブームを巻き起こしました。いわゆるピコピコした音楽ね。我々も楽曲に電子音楽を取り入れたこともありましたよ。

V：取り入れられてみていかがでしたか？

ユカイ：機械はね、俺たちのハートビートを聴いてくれないんです。ライブが盛り上がってテンポが速くなると、機械とどんどんずれていく。だから、逆にバンドマンが機械に合わせることがうまくなっていくという。それで思ったのは、狂わないリズムで演奏するのが果たして正しいのかと言ったら、そんなことはないんじゃないかということ。ロックは多少速くなったとしてもお客さんも熱くなっているし、人間のエモーションやハートビートに従って、全員で進んでいくから気持ちがいいんですよね。走りすぎちゃ困るんだけれど、みんなで走っていけるのなら、そのほうが楽しいんです。特にライブではね。

バンドとPTAの共通点

V：ユカイさんはブログでお仕事の話題の他に、お子様の成長についてもつづられていますね。

ユカイ：子どもは３人、長女と双子の息子たちがいます。妻と長女は関西に住んでいて、俺は息子たちと一緒に暮らしています。息子たちが中学１年生になりましたが、今はもう反抗期でたいへんですよ。

V：ユカイさんでもたいへんな思いをされているのですね。

ユカイ：育児は自分が成長するためにやっているのだと思わないとできないです（笑）。以前は素直だった子どもたちが、今は言うことを聞きません。納得してもらうための伝え方をいろいろ考えてはいますが、人に教えることって難しいなと思います。

V：授業参観などで、学校でのお子様たちの様子を見る機会はありますか？

ユカイ：もちろんです。音楽の授業も見ましたよ。

V：ご覧になっていかがでしたか？

ユカイ：俺たちの時代とは圧倒的に違うなと感じました。とにかく生徒たちが楽しそうなんです。合唱の授業だったのですが、最初は少人数のグループで練習して、次に複数のグループで歌い、最後のクラス全員での合唱には感動しました。

V：ユカイさんはPTAの活動もされているとのことですが、

1 マニピュレーター：生演奏では表現できない音源や打ち込み音を合成し、バンド演奏の中に取り入れるコンピューターの操作を担当する人。
2 イエロー・マジック・オーケストラ：細野晴臣、高橋幸宏、坂本龍一で結成されたグループ。通称「Y.M.O.」。

好きなことを選んだから、何が起きても受け入れられます。自分で選んだ道の責任は自分にあるんです。

印象に残る活動を教えてください。

ユカイ：息子たちが小学校５・６年生のときにはPTA会長を務めました。当時ちょうど学校の創立150周年で、学校側から「式典で何かおもしろいことをやりたいですね」と打診があり、『ムクロジの木』（作詞：ダイアモンド✡ユカイ、作曲：平井夏美、編曲：小野澤篤）を合唱にして歌う取り組みを思い付きました。

V：NHK「みんなのうた」で放送された楽曲ですね。

ユカイ：作曲の平井夏美さんは、井上陽水さんの『少年時代』の作曲も担当した音楽プロデューサーの川原伸司さんと同一人物です。まず川原さんに相談して、アレンジャーの山川恵津子さんに編曲と記念式典での合唱指導をお願いしました。

V：ユカイさんは指導はされましたか？

ユカイ：はい、少しだけ。「この響きがよくないな」なんて言ってみたりして（笑）。というのも、自分の歌の表現と、合唱での表現は異なるわけですが、楽譜に記されると意図が変わってしまう部分があるんです。もちろんそれは了承していたのですが、どうしても伝えたい言葉の響きは譲れなくて、歌い方についてアドバイスをすることはありました。それでね、PTAとバンドの共通点を見つけたんです。

V：どのようなことですか？

ユカイ：チームワークが重要だという点です。もともと俺はスポーツでもワンマンな人間なんです。でもシュートができるのはパスをもらえるから、歌を歌えるのはギターやベース、ドラムの演奏が支えてくれるから。「俺はシュートをさせてもらっていたんだ」と、PTAの活動を通してようやく気付いたんですよね。

V：なるほど。

ユカイ：どういうわけか自分は、真ん中に立っちゃうタイプの人間なんです。だけど、才能のある人って他にもたくさんいるわけで。だから自分は「真ん中に立つという役割」を担っているのだと理解して、メンバーを大切にしなきゃならない。チームワークが成り立つと、チームのレベルが上がってくるからさ。PTAもバンドも一緒。ローリング・ストーンズも、ミック・ジャガーのかっこよさだけじゃなくて、ギターのキース・リチャーズや、ドラムのチャーリー・ワッツたちの演奏、さらに照明や舞台監督など全てが合わさって感動を与えています。これもPTAと同じこと。

自分自身を愛してほしい

V：ユカイさんは人が社会で生きていくうえで、何が大切だと思いますか？

ユカイ：「愛」ですね。今の時代ってほんとうの意味での愛が足りないと思うんです。物事に対して無関心な人が増えていると思います。例えばモンスターペアレントと言われるような人たちって、子どもへの愛があるのではなく、自分に対して間違った愛をもっているように感じます。

V：正しく愛することが大切ということでしょうか。

ユカイ：はい。自分自身を正しく愛していないと、他の人を愛することはできないよね。まずは自分を愛すること、次に人に慈愛をもつこと。それが最終的には、日本、そして世界を愛することに広がっていくと思うんです。教育現場では学校の先生方もたいへんだと思いますよ、今の時代。追い込まれちゃうような環境ですよね。先生には「教えるよりも先に、まずは自分をしっかり愛してあげてほしい」と伝えたいです。

V：お子様たちに、伝えていることはありますか？

ユカイ：子どもたちには「自分が何かやって起きたことは、自分のせいだからね。パパやママ、先生や国、世界のせいではない。責任をとるのは自分だよ」と伝えています。というのも、俺の両親は公務員で、俺には公務員になってほしかったんです。しばらくは両親の希望どおりに大学にも進学したんだけど、あるとき「このまま敷かれたレールの上で生きたくないな」と思い一大決心して、ロック・ミュージシャンになりました。それからは、自分は好きなことを選んだのだから、今の道で何があっても「全部自分のせいだ」と受け入れることができています。自分で選んだ道には責任が伴うことを教えてあげたいんです。

V：お子様たちと接していて、感じることはありますか？

ユカイ：ある人が言っていたんです。俺たちの世代は物事を平面で見ている世代。でも今の子どもたちは生まれたときからデジタルだから、物事をさまざまな角度で多面的に見ることができる世代なのだと。その感覚を俺たちは分かってあげられないところがあるよね。ただ平面から見るよさはあって、それは深いところまで見て追究することができること。そんなふうに俺たちと今の子どもたちは見ている角度が違うから、全然噛み合わないんだよ（笑）。感覚を合わせようとしても答えは出ない。

V：デジタルの技術も発達していて、子どもたちを取り巻く環境も日々変化しています。

ユカイ：タブレットなど画面を触っているだけで、音楽をやっている気持ちになっちゃうしね。でも現実はそうじゃない。できたような気になっても「実際やってみると難しいな」と、音楽の醍醐味にぶち当たる。今の時代、俺たちの世代は生きていく中で、デジタルとアナログ、多面的と一面的、両方の視点でうまくやっていくことができるのかな？

魂をもって生きる

V：ユカイさんは今年がデビュー40周年となります。音楽における「言葉」についてどのように考えられてきましたか？

ユカイ：言葉を伝えることはとても大切ですけれど、バンド全体の音の響きも同じぐらい重要だと考えます。言葉というよりも、言霊（ことだま）とでも言うのかな。言霊が響くか響かないかを意識しています。いくらうまくても、響かないものってあると思いませんか？多少崩れていても、ぐっときたり、涙が出たりするものはある。

V：ありますね。

ユカイ：演奏していて感じるのは、楽譜の中のものだけが正しいわけではないということです。目に見えないものが、実は大切な意味をもっている。歌う人の気持ちや思いは、必ず音楽に響いてくるんです。

V：最後に、音楽をするうえで特に大切にされていることは何ですか？

ユカイ：何にも捉われない魂をもつことです。デビューして40年、ずっとロックをやって生きてきましたから、いろいろと試してみたこともありました。ですがいつでも自分の魂だけは大切にもっていました。魂に直結している歌こそ、いちばん強いものだと思うし、魂をもって生きることは、自分の成長にもつながるんです。あとは、自分が楽しくいることです。音楽って魔法に近いところがありますよね。見えないけれど確かに存在していて、いろんな感情が揺れ動くわけですから。人に楽しさを強要してはならないけれど、まずは自分が楽しんで、相手も楽しんでもらえるかっていうところが大切なんじゃないかな、音楽って。

● ダイアモンド✡ユカイ（だいあもんど・ゆかい）
1962年3月12日、東京都生まれ。埼玉県大宮で育ち、1986年ロックバンド・RED WARRIORSのヴォーカルとしてデビュー。日本武道館、西武球場でのライブを成功させ、1989年に解散してソロ活動を開始する。現在は、ソロや再結成したRED WARRIORSでの音楽活動を中心に、舞台・映画・バラエティー番組に出演するなど幅広く活動している。佐野ブランド大使、とちぎ未来大使、埼玉県こうのとり大使、埼玉県バスケットボールアンバサダー、深谷市親善大使も務めている。

『天高く鳴り響け』を発表する様子

Ask the teacher

授業者に訊く

学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校

佐野 靖先生（聞き手）と橋本武士先生（授業者）

東京タワーに程近い芝学園は、高等学校からの生徒募集を行わない完全中高一貫教育の男子校です。今回の「授業者に訊く」では、芝中学校２年生の和太鼓の授業をご紹介します。活気に満ちあふれた男子生徒を巧みにまとめ上げる橋本武士先生の指導法などについて、お話を伺いました。

授業者：橋本武士（学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校 芸術科教諭）
聞き手：佐野　靖（徳島文理大学 副学長・東京藝術大学 名誉教授）

本時の授業の位置付け

題　材：「楽器の音色を味わいながら、曲にふさわしい表現を工夫して演奏しよう」
教　材：ヒダノ修一 作曲『天高く鳴り響け』（『中学生の器楽』より）

教員と生徒、または生徒どうしの対話を中心に授業を進め、音楽が好きな生徒はもちろん、苦手な生徒にとっても、とにかく楽しい時間になるよう心がけています。

本題材では、和太鼓の構造や音色、歴史を確認したあと、『天高く鳴り響け』を演奏していきます。和太鼓の魅力の一つである“複数の奏者が呼吸を合わせ、リズムを共有することで生まれる一体感”を生徒たちに感じてもらうために、グループ練習の時間を大切にしながら進めます。本教材は、音楽が得意な生徒は音符から情報を読み取り、苦手な生徒は唱歌（しょうか）からリズムを理解することができるため、曲の完成に向けてグループのメンバー全員が意見を出し合い、主体的に取り組むことができます。また、掛け声やフチ打ちもあり、中学2年生にとってちょうどよい難易度なので、達成感が得られる教材となっています。

授業の流れ

	学習の内容・学習活動
導入	○前時までの学習を振り返る。 ・基本となる姿勢や構え方、打ち方を確認する。 ・リズムを確認する。 ○本時の課題である、強弱に関する表現について理解する。 ・作曲者が楽譜に込めた、リズム以外のメッセージについて確認する。
展開	○グループ練習に取り組む。 ・リズムの確認に加えて、強弱に注意しながら練習する。 ・同じパートで確認後、グループ全員で合わせる。 ・唱歌や掛け声で息をそろえる。 ○グループ発表をする。 ・互いの演奏を聴き、アドバイスをする。
まとめ	○本時の学習を振り返る。 ・自分たちの演奏に強弱などの表現の要素を加えると、曲の仕上がりにどのような変化が生まれるのか考える。

生徒の“楽しい”を大切に

呼吸を合わせて一体感を得る

佐野：本時で使用されていた教材『天高く鳴り響け』はいかがですか？
橋本：この教材を取り入れてから５年ほどたちますが、とても打ちやすく、掛け声や唱歌が入っているところがうれしいです。
佐野：やはり声を出すことって大切で、手を動かすだけだと体が楽器に向かっていかない感じがしますよね。
橋本：基本的に授業では教科書の教材を活用しており、楽器を演奏する楽しさやリズムが合ったときの一体感を生徒が自然に感じ取れるような指導を心がけています。
佐野：和太鼓の授業は中学３年間を通して行うのですか？
橋本：はい、１年生は基本のリズムを中心に練習し、２年生からはアンサンブルに取り組みます。３年生になるとさらに難しい曲に挑戦するため、教科書以外の教材を使うこともあります。
佐野：独奏フレーズを自分たちでつくることもできそうですね。授業中、他校の和太鼓部の演奏動画を鑑賞しましたが、あのような資料は彼らの刺激にもなりますし、すばらしいアイディアだと思いました。
橋本：プロの演奏を見せても、「どうせプロだから」と、演奏の出来に距離を感じながら鑑賞をする生徒が多いのですが、彼らと近い年代の演奏を見せることで、「すごい！自分たちにもできるかも！」と思ってくれます。
佐野：生徒は動画の著作権のことを気にしていましたね（笑）。鑑賞教材として授業で使用させていただく代わりに、自分たちの演奏を先方に提供することを説明していた場面では、彼らもいい緊張感を示していました。
橋本：この動画は６年ほど前にYouTubeで発見したもので、「この演奏動画を生徒たちに見せたら、食いつくかも…」と思い、演奏されている高校の和太鼓部顧問の先生に直接連絡をとり、使用許可をいただきました。「一度見学に伺わせてください」とお伝えしていたのですが、新型コロナウイルスの緊急事態宣言以降、行けておらず……。
佐野：この動画の演奏は舞台的なパフォーマンスとしての側面が強くて、今日の彼らとはギャップもあるのでしょうけれど、演奏には共通点があるとおっしゃっていましたね。
橋本：掛け声とリズムですね。今後、演奏時の姿勢も参考にしていきたいと思っています。
佐野：リズムを合わせることも大事ですが、一球入魂のように、一音一音に思いを込める意識も重要ですよね。単にリズム打ちだけで音楽を捉えるのではなく、楽器と一心同体になり、掛け声や唱歌を伴いながら音楽を表現する活動は、とても大切だと思いました。
橋本：地域のお祭りなどで和太鼓を演奏したことのある生徒もいますので、やはり親しみやすく、始めやすいといいますか。楽譜が読めなくても唱歌を唱えられればなんとなくリズムが合ってくるし、達成感にもつながります。
佐野：授業後に打楽器の振動がまだ教室内に残っているような、ああいう余韻を実感できるところが和太鼓のよさですね。
橋本：まだ数回しか和太鼓の授業ができておらず、少し不安ではあったのですが、“楽しい”から入っていくと生徒が興味をもちやすいので、そこに気を配りながら授業を進めています。
佐野：打楽器は大きな教育的可能性をもっています。大学の授業の一環で幼稚園や小学校低学年向けのアウトリーチを行ったとき、打楽器専攻の学生が

他校の和太鼓部の演奏動画を鑑賞する様子

演奏のお手本を示す橋本先生。生徒は教科書を参考に、手を打ちながらリズムを確かめる

「いくらこっちがいい音を望んでも、楽器が嫌がったらいい音はしない。だから太鼓と仲よくしないといけないんだよ」と言うんです。相手（楽器）の気持ちを考えないと、一方的ではいい音は出ないと。そういった感覚と掛け声や唱歌とがうまくリンクしている生徒たちの活動を見て、先ほどの言葉を思い出しました。

恥じらいなく元気に発表へのぞむ生徒

興味・関心の種をまく

佐野：今日は本題材の何時間目ですか？

橋本：全９時間中の４時間目です。最後の授業では、集大成としてクラス内発表を行い、姿勢、打ち方、リズム、強弱などを評価します。これらを完璧にしていちばんいい音を引き出し、和太鼓のよさを味わってもらうこと、そして生徒が自分なりの演奏で発表にのぞみ、満足感を得ることが目標です。

佐野：１クラス男子44～45人というのはなかなか想像がつかなかったのですが、授業中の生徒たちは、無邪気なほど楽しそうでしたね？

橋本：みんな仲がよく、素直で明るい生徒ばかりで、喧嘩しても次の日にはもうけろっとしています。なので、そういう雰囲気をうまく利用して授業を前に進めていくのが、芝学園で音楽の授業をやっていくうえではいちばん大切かなと思っています。

佐野：音楽系のクラブ活動に入っている生徒と入っていない生徒で、授業の理解度に違いはありますか？

橋本：ギター部、アカペラ部、吹奏楽部などの生徒は、ある程度楽譜が読めるのでリズムはばっちりです。ただ、だからといって、その生徒のほうが上手に演奏できるというわけではありません。みんな仲がいいので互いに観察し合ったり教え合ったりしながら、自分なりに解釈して表現する生徒が多いです。私が彼らに気付かされる部分も多くあります。最終的には楽譜を見ず、互いに息を合わせて演奏できるようになってほしいと思っています。

佐野：全グループが練習の成果を発表するのは無理だろうと思っていましたが、生徒が前に出てくるのが早いですね（笑）。そして席に戻るのも早い。そのおかげで、時間のロスがなくなっていると思います。

橋本：みんなの前に出て演奏をすることに対して、恥じらいが全くないですね（笑）。音楽は発表して、楽しんで、感動することが何より大切だと思っています。

佐野：もちろん１人で楽しむ音楽があってもいいのですが、発表する時間にこそみんなで音楽を学ぶ意味がありますよね。生徒はどんな曲が好きですか？

橋本：日本歌曲や最近のJ-POP、あと渋い生徒は昭和の歌謡曲も好きですね。この前も↑THE HIGH-LOWS↓（ザ・ハイロウズ）の『日曜日よりの使者』を歌ったら「これ知ってる！」と言った生徒がいました。テレビで使われていた曲だとか。

佐野：どこかで聴いたことのある曲のほうが、生徒は取り組みやすいですよね。高大連携に関連して、中学生に大学の定期演奏会などを鑑賞させる活動も計画されていると伺いました。

○ 佐野 靖（さの・やすし）
徳島文理大学 副学長・東京藝術大学 名誉教授

生徒一人一人の意見に笑顔で耳を傾ける橋本先生

橋本：中学生のうちからどんどん専門的なことに興味をもってほしいという学校の方針で、校長や進学関係の先生と大学とのつながりを利用し、こうした活動を進めています。

佐野：芸術に限らず何事も若いうちから種をまいておかないと、30代、40代になったときになかなか興味をもってもらえなくなると思うんですよね。そういう意味でも、さまざまな場に足を運んで「本物」から貴重な刺激を受けてもらえたらと思います。

各領域や分野と関連付けた年間指導計画

佐野：芝学園では生徒全員がヴァイオリンを実践する授業が特徴的ですが、何をきっかけにこのような授業を始められたのですか？

橋本：私の前任教諭が器楽の授業にヴァイオリンを取り入れたことです。リコーダーは小学校でも習うので簡単と感じる生徒や飽きてしまう子がいる反面、ヴァイオリンはオーケストラの鑑賞などとも関連付けることができます。

佐野：では、器楽は前半にヴァイオリン、後半に和太鼓をやる感じですか？

橋本：１年生は演奏するときの姿勢や楽器の鳴らし方を忘れないよう、３学期にもヴァイオリンの授業をやります。私はヴァイオリンが専門ではないので、演奏家の方を授業にお呼びして教室コンサートを行うなど、生徒にいい音を知ってもらう機会もつくっています。

佐野：授業にヴァイオリンを取り入れた効果はありましたか？

橋本：自分が出す音を含め、生徒がさまざまな音をよく聴くようになりましたね。ヴァイオリンは自分で音程を捉えないと上手に演奏できない楽器ですので。それと、鑑賞の授業でオーケストラの映像を見せたときの、生徒の弦楽器に対する視点が変わりました。

佐野：リコーダーは指遣いに意識が向きがちですが、ヴァイオリンは弓のあて方によって音色が全然違ってきますからね。ヴァイオリンを通して旋律感を養い、和太鼓でもってアンサンブルの一体感を学ぶ。こうした効果的な器楽学習の流れが、歌唱や鑑賞にもつながっていくと思います。創作はどのような授業をされていますか？

橋本：和太鼓やボディー・パーカッションを通して、グループ活動によるリズム創作を行っています。また、１人１台PCを所持していますので、カトカトーンをうまく授業に取り入れられたらと考えています。生徒の中には、既にGarageBandなどを使って自分で曲を作っている生徒も多くいるようです。

佐野：鑑賞はいかがですか？

橋本：教科書に掲載されているオペラやバレエ、オーケストラなどの作品をメインに扱っています。ヴァイオリンの授業と合わせてベートーヴェンの『喜びの歌』を鑑賞で扱うと、彼らの演奏もまた少し変わってきます。あとは和太鼓のあとに日本音楽と関連させて歌舞伎を鑑賞するなど、生徒が興味・関心をもって授業に取り組めるよう、各領域や分野間で学習内容がかけ離れすぎないよう意識しています。

佐野：年間指導計画の作成は、音楽科の先生に任せられているのでしょうか？

橋本：そうですね。自由にやらせていただいています。

佐野：先生は高等学校の担任をされて

○ 橋本武士（はしもと・たけし）
学校法人芝学園 芝中学校 芝高等学校 芸術科教諭

グループに分かれて発表の準備を行う様子

グループ発表の様子

いるということですが、高校生の授業ではどのような実践を行っていますか？

橋本：ギターの弾き語りやトーンチャイム、オカリナの演奏などをやります。音程を捉えるのが難しい楽器を扱う際は、特にヴァイオリンの学習が役立っているなと感じます。あとは沖縄の三線やバンド演奏ですね。

佐野：お話を伺って、さまざまな活動が生徒たちの中で関連付けられるよう、授業が組み立てられているということがよく分かりました。

生徒との対話を通した授業づくり

佐野：今日の授業を拝見して、生徒がきちんと楽譜を理解したうえで、アンサンブルに取り組んでいる印象を受けました。

橋本：前時はリズムの確認までで終わってしまったのですが、今回のように唱歌と発声、休符の確認などをきちんと行うことで、生徒も手応えを感じられたと思います。ヴァイオリンの授業でも読譜については意識して指導していますが、中には音符が読めなくても、指番号とボウイングの記号さえあれば弾けてしまう生徒もいます。

佐野：「楽譜を読んで楽器を弾く」という我々にとって当たり前の感覚が、おそらく生徒たちにはあまりないんですよね。読めなくてもなんとなく演奏できるといいますか。ただ、こうした実践を通して読譜力を養えるというのは、とても恵まれていることだと感じます。グループ活動の際、生徒一人一人がしっかりと課題に取り組んでいる姿が印象的でした。

橋本：前方のスクリーンにグループ別の生徒の名前と、その横に数字が書いてあったと思うのですが、あれは毎回グループ発表時に5点満点で発表を評価しているものです。そうやってゲーム感覚にすることで、生徒も盛り上がってやる気を出してくれます。他教科も含めて、生徒はグループ活動にある程度慣れているというか、楽しいようです。

佐野：授業の前に騒がしいクラスだとおっしゃっていましたが、そんな彼らを受け止める先生の包容力がすばらしく、みんなほんとうに屈託なく、よそ行きの態度を見せずにのびのびと授業にのぞんでいました。こうした授業づくりは、どのように生徒と接することで実現するのでしょうか？

橋本：私は中学まであまり音楽が得意ではありませんでした。自分を出すのが得意ではなかったし、楽譜も読めず、苦手意識から素直に音楽を楽しめなかったんです。そういう経験があるので、まずは生徒に楽しく授業を受けに来てもらいたいという思いがあります。発言はなんでもしていいけれど、話を聞くときは聞く。授業を受けたい生徒の妨げとなるようなことは絶対にしない。ただ、クラスの雰囲気を前向きにもっていくような発言は大歓迎、というようにやっています。あとは生徒としっかり対話をすることですね。

校長先生より

芝学園（芝中学校・高等学校）は私立の中高一貫教育の男子校です。私達は校訓の「遵法自治（じゅんぽうじち）」と仏教精神の「共生（ともいき）」のこころを大切に12才から18才の青少年の人間力の育成を基盤においております。3代校長 渡邉海旭（わたなべかいぎょく）先生は、毎年の年頭訓示で以下の様に話されました。

諸君は将来、日本の中堅になる人だから
心身共にしっかり修行しなければならぬ

この海旭先生のお言葉は芝学園に代々伝わる根っこの部分であると思います。修行とは苦しく強いられた業と考えられがちですが、物事に夢中になって成し遂げようと進むことと解釈し、教職員・学校がひとつになって“チーム芝”として生徒たちに一番良いことを考え、日々努力を続けてまいりたいと考えております。そしてふるさと芝を誇りに思う人間的に超一流の青年を育ててまいりたいと考えております。

芝学園15代校長
武藤道郎 先生

「カトカトーン通信」のご案内

音楽Webアプリケーション「カトカトーン」の活用例やオススメ情報をお届けする
「カトカトーン通信」の最新版とバックナンバーを教育芸術社Webサイトで公開中！
vol. 7では「小学生の音楽6」より音楽づくりの展開例をご紹介、
vol. 8ではクイックガイドや音楽の要素の対応表などを掲載しています。
詳しくは、以下の二次元コードまたはURLをご参照ください！

https://www.kyogei.co.jp/katokatone/info/

カトカトーン通信 vol.7

「小学生の音楽6」（令和6年度用～）
p.22 ボイスアンサンブル

声のひびきを使ってリズムを重ね合わせ、
アンサンブルをつくります。
カトカトーンを活用することで全体の構成を可視化して
把握できます。

WEB漫画もチェック！

操作や指導のポイントを紹介しているよ！

カトカトーン通信 vol.8

カトカトーン クイックガイド／
操作に慣れてみよう！／
五線譜・音楽の要素 対応表

困ったときの確認にも、
使い始めのワンステップにも
ご活用いただけます。

このボタンは何？
○○はどこで変えられるの？
どういうことができるの？

キホンのギモンはここで解決！

新たな音楽Web
アプリケーション
カトカトーン

https://www.kyogei.co.jp/katokatone/

子どもたちの学びに寄り添うアウトリーチ

赤塚小学校×東京フィルハーモニー交響楽団のメンバーによる弦楽四重奏

「総合的な学習の時間」が導入されて以来、学校現場でのアウトリーチ実践が高まりを見せる中、芸術分野でもさまざまな取り組みが模索されてきました。本記事では、令和6年12月19日に板橋区立赤塚小学校で行われた、公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団（以下、東京フィル）のアウトリーチ活動の模様をご紹介するとともに、音楽科の南野秀人先生と佐野靖先生（徳島文理大学 副学長・東京藝術大学 名誉教授）による対談をお届けします。

プログラム
（午前の部）※

1. アイネ クライネ ナハトムジーク 第1楽章（モーツァルト 作曲）
2. チャールダーシュ（モンティ 作曲）
3. 愛のあいさつ（エルガー 作曲）
4. 組曲『動物の謝肉祭』から「白鳥」（サン=サーンス 作曲）
5. カノン（パッヘルベル 作曲）
6. ミュージカル『サウンド オブ ミュージック』から「私のお気に入り」（ロジャース 作曲）
7. 喜歌劇『こうもり』から序曲（ヨハン・シュトラウス2世 作曲）
8. 赤塚小学校校歌［弦楽四重奏バージョン］
9. 映画『リメンバー ミー』から「リメンバー ミー」（ロペス 作曲）
10. ラデツキー行進曲（ヨハン・シュトラウス1世 作曲）

※午後の部では、参加した学年に合わせてプログラムを一部変更して行われた

東京フィルでは、文化庁が主催する「舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演）」の採択を受け全国の学校を訪問するなど、音楽を通じたさまざまな教育プロジェクトを展開しています。この事業は、全国の小・中学校等においてトップレベルの文化芸術団体による巡回公演を行うことを通じて、将来を担う全ての子どもたちの豊かな感性を育む場を作り、芸術鑑賞能力の向上を図るとともに、文化的な地域格差の解消を促進することを目的としています。今回ご紹介する赤塚小学校のアウトリーチでは、音楽科の授業の一環として、学校が独自に依頼し、東京フィルのメンバー４名による弦楽四重奏の公演が実現。４～６年生の児童約300人が午前と午後に分かれて鑑賞しました。

親しみのある曲をプロの演奏で

事前に学習した鑑賞のマナーを児童が確認したところで、アウトリーチはスタートしました。東京フィルの団員が招かれ演奏が始まると、児童の空気が一瞬で変わり、目の前の演奏に集中していく様子が伝わってきます。

プログラムは、授業や日常で一度は耳にしたことのあるクラシックの名曲を中心に、各楽器の音色の違いを感じ取ることのできる曲から始まり、次第に、音が重なる響きのよさや美しさ、旋律の重なり方の違いを味わう曲へ、といった流れで構成されています。また、クラシック作品だけではなく、児童が音楽学習発表会で演奏した曲や、弦楽四重奏用にアレンジされた赤塚小学校の校歌も披露されました。慣れ親しんだ曲や思い入れのある曲の数々に、児童は互いに顔を見合わせたり、曲に合わせて旋律を口ずさんだり、さまざまに反応しながら鑑賞しました。

演奏は舞台上ではなく、児童と同じフロアで行われます。演奏中に、奏者が児童の顔のすぐそばまで近寄ってみせると、児童は大興奮。パフォーマンスに思わず歓声があがる場面もありました。アンコールを含む全10曲、およそ１時間の公演の間、じっと聴き入ったり、リズムにのって体をゆらしたり手拍子をしたりと、終始夢中になって楽しむ児童の様子が見られました。

東京フィルハーモニー交響楽団のメンバー。左から藤村政芳さん（Vl.1）、中村洋太さん（Vl.2）、黒川実咲さん（Vc.）、今川 結さん（Va.）

児童の目の前でくり広げられる迫力のパフォーマンス

アウトリーチならではの鑑賞体験

音楽アウトリーチの最大の魅力は、一流の演奏を間近に聴けることですが、現場の実態に合わせた鑑賞指導が受けられることも大きなポイントの一つです。今回は、案内役の方がプログラムを進行するだけでなく、日頃の学習内容を織り交ぜながら、各曲の解説や聴きどころを分かりやすくレクチャーすることで、児童が曲を理解して楽しめるよう工夫されていました。また、演奏会の終盤には質問コーナーが設けられ、児童の素朴な疑問に、演奏家が一つ一つ丁寧に答える場面も。「演奏していて何がいちばん楽しいですか？」という問いに対しては、「みんなで音を合わせて一つの音楽をつくり上げていくことが楽しい」「演奏は聴いてくれる人がいるから成り立つ。音楽は目に見えず一瞬で消えていくからこそ、奏者と聴く人がその瞬間を共有できることが幸せ」などふだんでは聞くことのできない思いが語られました。

間近に体感するプロの演奏に、目で、耳で、全身で音楽を楽しむ児童の姿が印象に残っています。このような経験が児童の豊かな感性を育み、日々の学習に主体的に取り組むきっかけを生み出すことを実感する機会となりました。（ヴァン編集部）

案内役の方（左）が質問などを投げかけ、児童の気付きをサポート。ここでは、ヴァイオリンとヴィオラの大きさを比較し、音色の違いを確かめた

アイコンタクトを取りながら演奏する様子

INTERVIEW
インタビュー

教師と演奏家が連携したアウトリーチ

佐野：アウトリーチ活動を取り入れようと思った動機やねらいは何ですか？

南野：私が小学生のときに、学校でプロの和楽器奏者の演奏を聴いたのですが、そのときの感動がずっと記憶に残っていました。のちに、そうした活動がアウトリーチとしてさまざまな分野や団体で行われていることを知り、子どもたちの記憶に残る経験をたくさんさせてあげたいと積極的に取り入れるようになりました。もちろん、日頃の授業から得られることもたくさんありますが、私の言葉だけでは感じ取れないことを、子どもたちなりの視点で毎回いろいろ学んでくれていて、やはり本物に触れる機会は何ものにも代えがたいと実感しています。

佐野：ご自身の子どものときの経験が出発点なのですね。アウトリーチ活動を取り入れたくても、始め方が分からないという先生の声をよく聞きます。依頼するときはどのような工夫をされていますか？

南野：音楽の場合は授業の１時間、もしくは２時間分を使って演奏会形式でお願いするのですが、プロの演奏家にただ演奏を披露してもらうのではなく、子どもたちにとってよりよい内容のものを届けられるように、教師と演奏家が連携しながら本番に向けて準備していくことを心がけています。依頼した団体や演奏家に任せっきりで当日を迎え、思っていた内容と違うということが起こると、せっかくの機会が失われてもったいないので、そこは私としても緊張感をもって準備を行っています。奏者の指定まではしませんが、話し合いを重ねて信頼関係を築きながら子どもたちに寄り添った内容になるよう重きを置いてほしいということは、いつもお伝えしています。

佐野：今回の東京フィルハーモニー交響楽団との活動でも、事前のやり取りなど、かなり準備をされたのでしょうか？

南野：そうですね。12月の実施に向けて６月頃からお声がけをして調整していく中で、事務的な打ち合わせだけではなく、子どもたちの学習状況を伝えたり、楽器や曲の提案もしたりしました。例えば、プログラムに入っていた『私のお気に入り』や『リメンバー ミー』は、直前の音楽学習発表会で子どもたちが演奏した曲でして、楽器は異なりますが、子どもたちがたくさん練習したなじみ深い曲をプロの方に目の前で演奏していただきたいということで、こちらからお願いしたものです。本校の子どもたちに寄り添ったアウトリーチ活動を行うためにご理解、ご協力のもとやっていただきました。

佐野：学校の日常と結び付いた非日常という視点はとても重要だと思います。アウトリーチは、ホールでプロの演奏を聴く鑑賞教室とは違うし、ゲストが学校に来るので日常の音楽の授業とも少し違う。日常の授業もとても大事ですが、非日常でまたそれがより生きてくるというか、いい経験や節目になりますよね。

学びがつながるプログラム

佐野：実際によく準備されたことの伝わる内容で、演奏もすばらしかったですね。パフォーマンスも過剰ではなく、でもしっかりと見せ場をつくり子どもたちを惹（ひ）きつける演出もあって、なかなか見応えがありました。子どもたちの反応を含め、先生が期待していたものと比べてどうでしたか？

南野：子どもたちは、本物の演奏にあれだけ近くで触れられることがすごく刺激的だったようで、アンケートでも「おもしろかった、また聴きたい」という声がたくさんありました。プログラムの流れもとてもスムーズで、子どもたちが飽きずに楽しめる絶妙な選曲と間合いだったと思います。また、本校の校歌を弦楽四重奏バージョンにアレンジしていただくなど、本校のための演奏会にしていただけたので、子どもたちにとっても、私にとってもすてきな経験になりました。

対談の様子

質問コーナーで、笑顔で答える演奏家と元気よく手を挙げる児童

佐野：『チャールダーシュ』をプログラムの始めのほうにもってきた点もよかったですね。これまでの演奏会だと少し古典的な静かな曲から始まって、次第に激しい曲になっていき、いちばん盛り上がる曲を最後におく流れが多かったように思いますが、こうしたアウトリーチの場では、今回のように少し派手な曲でまずは子どもたちの心をつかむのが重要です。加えて、子どもたちの日常と結び付く曲も入っていて、そういう面でも、今回のプログラムは質・量ともに高く評価できます。アウトリーチを行う側もおそらく日々研究を重ねているのでしょうね。

南野：コロナ禍を経て、アウトリーチ活動に力を入れている団体も増えており、いろいろ試行錯誤されているというお話も伺います。

佐野：ただ、学校ではこうした活動が削られて、どの教科も日常のカリキュラムをきちっとこなす方向性が高まっています。私自身もそこに危機感をもち、大学では音楽アウトリーチという授業をつくりました。

南野：予算確保も課題の一つで、依頼できない年があるのも現状です。学校側もこういう機会をどんどん取り入れていくことで、学校と音楽業界や演奏家がつながり、発展するきっかけにもなったらうれしいですね。

佐野：今回の活動後、授業での子どもたちの変化などは感じますか？

南野：音楽的な知識の向上は授業でも実感します。特に５年生は『アイネ クライネ ナハトムジーク 第１楽章』を学習し、今回のアウトリーチを経て『祝典序曲』を聴いたので、楽器名がすんなり出てくるようになりましたし、弦楽器の音色を理解して聴き取れるようになりました。遠くに鳴っている伴奏のような旋律でも気付ける子が増えました。

音楽を通じて言葉を鍛える

佐野：質問コーナーでのやり取りも印象的でしたね。

南野：演奏家の生のお声を聞く機会はなかなかないので、質疑応答のときに語ってくださったお話が子どもたちにいい意味で引っかかっていて、知識の習得に限らず、さまざまな気付きにつながったと思います。

佐野：演奏家の言葉ってとても重要なんです。教科書で解説される「間違いのない言葉」も知識としては大事ですが、彼らの実感から出た言葉が子どもたちの想像力や思考力につながると私は思っています。脳科学の専門家いわく、全ての学力の基礎は言葉だそうです。音楽科では自分が思った感じとかイメージを言葉にしていくので、言葉を増やし鍛えていくという点でもとてもいい教科なんですよね。

南野：授業中の子どもたちの発言でも、同じ内容のことを言っているようで、それぞれが感じているニュアンスはきっと少しずつ違っているはずです。その多様性やいろいろな考え方を学校という場ではまず言葉で説明します。初めは説明し切れなくても、友達どうしあれこれ言って共通理解を図ることが、子どもたちの表現力にもつながると思います。

佐野：うまく話せなくてもいいんです。自分の言葉で考えていくことが大切で、そこで身に付けた言語能力が、他の教科の学びの向上、子どもの学力向上につながると思います。そういう面では、演奏家も言葉を鍛えてほしいと思っています。自分たちの音楽を子どもたちに、どう言葉としても伝えていくか。そのように思考し、紡ぎ出された言葉が自身の音楽性も高めていくのではないでしょうか。

南野：そうですね。音楽の楽しさや音楽科としての学びだけではなく、演奏家ってどんな人なのかをお話から感じたり、一緒に参加していただいた司会者や楽団事務局の方の様子を見たりすることがある意味キャリア教育の視点というか、違った見方や出会いの一つの場になったらいいなと思い、このような機会を取り入れています。こうした経験が積み重なって、さきほどおっしゃった非日常体験のいい部分がどんどん子どもたちの日常になって、彼ら自身が豊かになってほしいと思います。

心に残る音楽体験を

木原健太郎さんと湖畔小学校の児童による「ツナガル“音の環（わ）”プロジェクト」

本記事では、日々の授業の枠を越えて、生きた音楽体験を子どもたちに届ける取り組みにスポットを当てます。プロのジャズピアニスト木原健太郎さんが、釧路市立湖畔小学校の児童と卒業ソングを制作する「ツナガル“音の環”プロジェクト」を実施。その初演の模様をご紹介するとともに、木原さんと校長（取材当時）の種市文彦先生、教頭の斎藤貴子先生に制作秘話などを伺ったインタビューをお届けします。

会場となった釧路市立湖畔小学校

「ツナガル“音の環”プロジェクト」は、地元、釧路市の子どもたちと音楽やピアノを通した交流がしたいという木原さんの思いから始まった、児童生徒参加型の音楽活動です。学校でのソロ・ライブの他、子どもたちとの共演や共同した楽曲制作などに取り組んでいます。今回取材したのは、木原さんと湖畔小学校の児童で制作した、卒業ソング『一歩 前へ』の初演です。令和７年２月20日、雪晴れとなったこの日、全校児童およそ300人が木原さんの伴奏で歌うお披露目の会となりました。

お披露目に向けて

会場となった体育館には釧路市長や学校関係者の方も駆け付け、様子を見守ります。お披露目会は、プロジェクトの実行委員でもある児童会の子どもたちによる進行で始まりました。初めに、実行委員が動画にまとめたプロジェクトの軌跡が紹介され、『一歩 前へ』完成までの道のりと初演に向けての取り組みが語られます。動画の中では過程だけでなく、プロジェクトが始まった頃の思いや気持ちの変化などにも触れられ、さまざまな努力を重ねてこの日の初演に臨んでいることをみんなで再確認しました。

初演への意気込みが伝わったところで、木原さんへとバトンタッチ。会場を盛り上げるピアノソロ・ライブが展開されました。ピアノの優しい響きや力強いタッチなど、木原さんのさまざまな音色が子どもたちを魅了します。また、軽快なスウィングのリズムにどこからともなく手拍子が起こり、木原さんが奏でるリズムに、子どもたちが手拍子で応える即興的なコールアンドレスポンスも行われるなど、会場は一気にライブハウスへと様変わり。徐々に激しくなる掛け合いに会場の温度はさらに上昇し、初演に向けた空気づくりが整いました。

心を通わせた初演

気持ちの準備が整い、いよいよ本番です。種市校長先生の指揮と木原さんのピアノ伴奏のもと、『一歩 前へ』の演奏がスタートしました。歌詞には未来への希望が込められ、１番では共に過ごした仲間たちとの思い出を、２番では仲間たちの存在を胸に、新たなステージへと向かう自分たちに宛てたメッセージを歌っています。温かく柔らかなメロディーと木原さんの伴奏が、子どもたちの歌詞をより引き立たせます。２番からは木原さんも歌に加わり、最後はみんなで手拍子をしながらの大合唱となりました。歌唱後には自然と拍手が湧き起こり、全校で歌った感動をみんなでかみ締めている様子が伝わってきます。そして会の最後では、高鳴った気持ちを抑えられないとばかりに、アンコールとして『いい日にしようね』（石原一輝 作詞／木原健太郎 作曲）を全員で歌唱、体育館中に明るく爽やかな歌声が響き渡りました。

木原さんは、「子どもたちの純粋な“今”の気持ちを言葉にしてほしい、それを歌にしてずっと心に残るものにしたかった」と企画の経緯を語ります。この日の体験と歌が、歩み続ける子どもたちにいつまでも寄り添ってくれることを願っています。

（ヴァン編集部）

プロジェクト実行委員がまとめた動画

思いを込めて演奏する木原さん

指揮をする種市校長先生（取材当時）とピアノで弾き語る木原さん

全校合唱の様子

INTERVIEW
インタビュー

これまでの経験が生きた演奏

――意欲的に活動する子どもたちの姿が印象的で、全校が一体となり歌唱する場面も見応えがありました。

種市：湖畔小は100年を超える歴史がありますが、記念の集会など節目ごとに音楽活動に取り組んでおり、全校合唱をしたり、吹奏楽をバックに合唱奏をしたり、その時々でみんなが音楽を通して一つにまとまるということを続けてきました。音楽の指導に熱心な先生も多く、また、音楽活動に最適な音響のよい多目的広場ができてからは、ますます活動の幅が広がっています。そのような中で、今回木原さんからこのような機会をいただき、自分たちで作詞したオリジナルソングづくりを通して、学校が一つになれたことは、子どもたちにとっても貴重な経験だったと思います。

――音楽を大事にしてきた伝統が、今の先生や子どもたちにも受け継がれているのですね。木原さんとはどのようなきっかけで交流をされるようになったのですか？

種市：６年ほど前に北海道音楽教育研究大会のゲストとして木原さんにお越しいただき、そのときから個人的なつながりが始まりました。また、昨年の卒業式では当時の６年生が『勇気の鍵』（石原一輝 作詞／木原健太郎 作曲）を歌わせていただきました。木原さんには子どもたちの練習にも参加していただき、そのような流れもあって今回お声がけいただきました。

斎藤：練習で木原さんに伴奏をしていただくと、歌が得意ではない子どもたちでも声が出るんです。今年度も５年生が学習発表会の合唱曲に『いい日にしようね』を選びました。木原さんに本番で伴奏をしていただくこともあり、練習に来ていただいたのですが、学校以外での音楽経験がない男の子が、木原さんのピアノを聴いた瞬間「すごい」っていうんです。木原さんが演奏すると、歌いたくなる、声を出したくなるという高学年の子どもたちの経験が今回の初演につながっているのかなと思います。

子どもたちの波動を音に

――今回の作詞にあたって、子どもたちはどのように言葉を紡いでいったのでしょうか？

種市：プロジェクト実行委員会の子どもたちが中心となり進めてくれました。歌で伝えたい言葉をタブレット端末を使って全校にアンケートで募り、集まった言葉をもとに、６年生で話し合いを重ねて歌詞『一歩 前へ』ができあがりました。GIGAスクール構想により１人１台端末が支給されましたが、子どもたちの順応力や応用力にはほんとうに驚かされます。

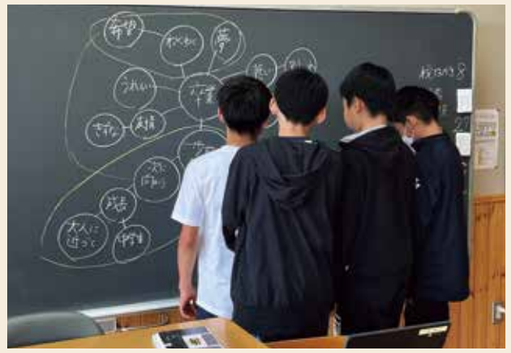
斎藤：アンケートを行うだけではなく、集まった言葉をAIで集計・分類して、どのような言葉に票が集まったのかを実行委員が視覚的に分かるようにまとめてくれました。そういうツールを使用することも子どもたちが自ら考え実践してくれて、一から自分たちの手でつくり上げた歌詞なんです。

――全校児童の思いの詰まった詞なのですね。すてきな作品に仕上がっていましたが、木原さんは子どもたちの詞からどのように音楽を着想されたのですか？

木原：まず、詞をまとめた実行委員会の子どもたちと対面したときに、僕がインタビュアーになって、どういう思いで詞をまとめたのかなど、たくさん質問してその子たちの空気感を読み取っていきました。そこから感じたイメージをしばらく自分の中で温めて、メロディーが降りてくるのを待つみたいな感じでした。他の仕事をしながらも頭の片隅にずっと彼らの印象が残っていて、ふとした瞬間にパッと思い浮かぶんですよ。そういう意味で、波動のキャッチボールがすごくスムーズでしたね。だから書き始めたら30分くらいで一気に書き上げられて、あとから音域など細かな調整をしていくという作業でした。

――子どもたちのつくった詞には、ほとんど手を加えなかったそうですね。

木原さんとの初対面。この日は詞に込めた思いを伝え、木原さんに歌詞を託した



歌詞のイメージを話し合う実行委員会の子どもたち

木原：フレーズによって語尾などを整えた部分もありますが、言葉を変えたところはほぼなかったですね。詞の完成度にはほんとうにびっくりしました。

――学校の大事な宝物になりますね。曲を聴いた第一印象はいかがでしたか？

種市：完成した『一歩 前へ』は、前向きな内容の歌詞にぴったりのとてもノリのいいアップテンポな曲で、初めて聴いた瞬間にほれ込みました。校歌ともまたガラッと雰囲気の異なる新たな本校の定番ソングができ、子どもたちもきっとこの歌を大事にしてくれると思います。

将来につながる音楽体験を

――コロナ禍では、音楽科の活動に苦労されたと思います。今回のような経験は子どもたちの刺激になりますね。

斎藤：そうですね。今の高学年の子たちはコロナ禍で声を出せなかったり、マスクをずっと着けていたりという環境で育ちました。音楽の授業では、低学年のうちにどれだけ楽しく音楽表現をするかがとても大事なのに、特に今の６年生は、その楽しさを１、２年生の間にあまり味わえなかったんです。それもあり、歌うときも少し躊躇したり、なかなかリズムにのり切れなかったりという部分がありました。教師たちで試行錯誤を重ね、なんとか音楽活動を地道に続けてきましたが、今回の木原さんとの交流が子どもたちの肥料になって、これからさらに成長していくきっかけになったと思います。「歌うことやリズムにのるって楽しい」という経験をしたうえで、中学校に行けることがほんとうによかったなと思います。

――木原さんは、今回子どもたちとコミュニケーションを取られて感じたことはありますか？

木原：今日はしっかり心を開いて歌ってくれたなと思いました。２日前のリハーサルで６年生の歌を聴いたとき、実は少し心配していたんです。今日は低学年の子たちの歌い出しが、ただ大きくがなるのではなく、しっかり心を開いてくれているように感じて、その勢いが６年生にもちゃんと伝わり声を届けてくれましたね。このパワーというかエナジーはやっぱり小学生のすごいところだと思います。心を開いたときの、音や声の波動のようなものを強く感じました。何回か一緒に練習しましたが、ここまでの演奏は本番が初めてで、途中からは泣きそうになって歌えませんでした。なかなかそんな経験ないんですけど、今日はちょっと詰まりましたね（笑）。

種市：今回は曲全体をみんなで歌うのではなく、１、３年生でスタートし、次に２、４年生が歌ってというように、あえて分業制にしました。曲をみんなでつないでいって、最後５、６年生に渡すという形にしたのですが、それが木原さんのおっしゃる「波動」として、５、６年生だけではなかなか出せない表現につながったかなと思います。

斎藤：全校での合唱がファーストテイクだったことも成功しましたね。１、３年生、２、４年生、５、６年生ではそれぞれ合わせましたが、実は全校で歌ったことは一回もありませんでした。今回の初演がまさしく、全校で歌ったパワーだったんです。始まる前は不安もありましたが、子どもたちにとっては、みんなで歌ったらどんなふうになるんだろうというワクワク感にもつながったようですね。

――最後に、プロジェクト名にちなんで、今回の活動をどのようにつなげていきたいですか？

種市：木原さんが釧路を拠点に活動されているので、これをきっかけに、また違う場面で子どもたちが木原さんとつながってくれるとうれしいなと思います。もう一方で、音楽は生業にしなくとも、例えば今日のコールアンドレスポンスのように一緒に手拍子して表現するとか、さまざまな親しみ方があります。木原さんに教わったことを思い出しながら、子どもたちが日常生活の中で、いつもそばに音楽があることを感じて、それによって自分の心が豊かになるような、そんな経験を積み重ねていってほしいですね。

左から斎藤貴子教頭先生、木原健太郎さん、種市文彦校長先生（取材当時）
バックにはアンケートのまとめと『一歩 前へ』の歌詞が掲示されている

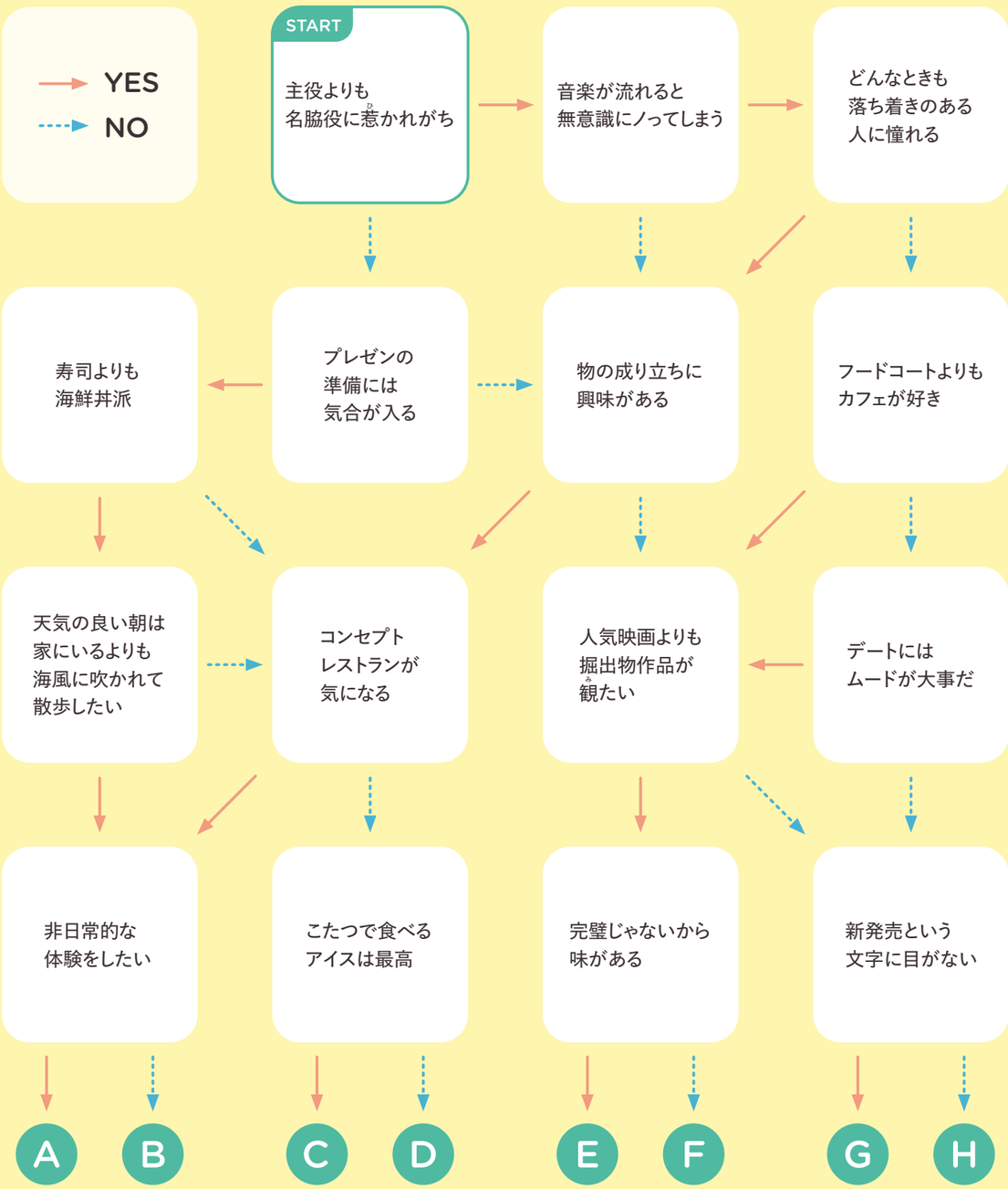
音楽診断

Kyogei Presents

第24回 ジャズ“超”入門編

『ヴァン』オリジナルでお届けする音楽診断企画の第24弾のテーマはジャズ“超”入門です。8曲の中から、あなたにおすすめする作品をご紹介します。

監修・解説＝小沼純一　Text ＝ Jun'ichi Konuma



あなたにぴったりの作品は？

A　ミニマルな、でも自由な、楽器たちの滑空
Hang Gliding
マリア・シュナイダー／発表年：2000年

3拍子？ あれ、ちょっとずれる。何拍子？ ときどき拍子は変わるけど、メロディは、音楽のながれはスムーズ。息を吸い、吐く、その循環のリズムが音楽のながれになっている。なるほど、空をとんでいるイメージ、風のぐあいでリズムも揺れる。呼吸っていつもおなじじゃないし。ながめは、左から右、上から下と、まさに自由な空。サックスと金管がさまざまに組みあわせる、2000年リリースのジャズ・オーケストラ名品。

B　心地よく乗れる、陽気なリズムと楽しげブラス
A列車で行こう
デューク・エリントン／発表年：1941年

何度かひびくイントロのピアノ。これって汽笛？洗練されたメロディとサウンドのテンポは電車の走行？《A列車で行こう》は、エリントンと組み数々の名曲をうむビリー・ストレイホーンが1939年に作曲、41年に録音。都市ニューヨークを走る地下鉄の名も広まった。ニックネーム〝公爵(デューク)〟のエリントン、ビッグバンドのリーダーとしてバンドを率いてニューヨークはハーレム、コットンクラブでの専属演奏は、100年前、1920年代の禁酒法時代。

C　巨匠が残したジャズをつなぐ軌跡
Milestones
マイルス・デイヴィス／発表年：1958年

なんとオシャレでスマートな。ごくすくない音を何度かくりかえし、つぎに音程を変え、おなじようにくりかえす。ドラムスとベースのきざむビートにのって、そのシンプルさが、逆にどれほど豊かなものを心身に伝えてくれることか。あいだに挿入されるわずかなピアノのアクセントも。1950年代後半から亡くなるまで、マイルス・デイヴィスはジャズを牽引。ファースト・ネームと〝里程標〟の意をかさねるタイトルにも唸る。

D　美しさを超越し、音で遊ぶ
聖者の行進
ルイ・アームストロング／発表年：1938年

ひとつの旋律に導かれながら、ほかの楽器は旋律の一部をくりかえしたり脱線したりからんだり。トランペットや歌声の、〝キレイ〟という語におさまらぬ、愛称〝サッチモ〟、ルイ・アームストロングの味。聖書の文句にもとづき葬列でしずしずと奏したあとの陽気さが、愉快さ。北アメリカの土地につれてこられたアフリカン・アメリカン。キリスト教や西洋楽器に出会い、生まれおちたスピリチュアルズ(霊歌)。そこにジャズへと変わりゆくさまが。

E　端正なビートから溢れ出す技巧
Epistrophy
セロニアス・モンク／発表年：1941年？

声でうたうにはちとツラい。息を吹きこんだり、鍵盤に指をそわせたりしてこそのうごきか。ビ・バップなるスタイルは、ダンスに相応しい滑らかなスウィングのあと、ごつごつしたメロディ、複雑な和声進行や転調、個人芸きわだつ即興が、〝ジャズ〟を近現代化、モダン化した。第二次世界大戦勃発の空気も感じられるか。セロニアス・モンクは、曲も突飛だが、ピアノの弾き方もうまいのかへたなのかわからぬくらい独特。しかも中毒性あり、だ。

F　燦々と高鳴るサックス、柔らかなざわめき
パストラル
渡辺貞夫／発表年：1969年

ざわざわした、エレクトリック・ギター、そしてベースとドラムスの8ビートによる、音の風景。ジャングル？そこに、鳥が啼く。甲高い、笛のよう。サックス？ソプラニーノ・サックスか。シンプルな音の選びとならびが、一度耳にするとしっかり記憶にのこる。渡辺貞夫、この列島の〝ジャズ〟界を牽引、時代に応じたスタイルをみずからのものとし、メディアをとおして幅広い層にアピール。この頃はまだ30代半ばの1969年。いまも元気だ。

G　跳ね回るサウンド、歪んで弾けて、色とりどりに
Chameleon
ハービー・ハンコック／発表年：1973年

カラダが揺れる、クセのあるサウンド。エレクトリックな、アコースティックな楽器ではだせなかった音色がつぎつぎに登場。音楽とテクノロジーがともに新規さを探っている時代でもあり、それまでの〝ジャズ〟をベースにしながら、1960年代からの〝ファンク〟フレーバーが濃厚。ハービー・ハンコックは、1960年代終わりからエレクトリック・ピアノを使いはじめ、ほかにもシンセサイザーなど複数のキーボードを駆使、グルーヴィーに。

H　荒っぽさに宿る妖艶に酔いしれて
Sing, Sing, Sing
ベニー・グッドマン／発表年：1938年

〝野蛮〟なることばが浮かびそうになるドラムス。トロンボーンのシンコペーテッドなうごき。トランペットの咆哮。そしてメインの短調、ふっと顔をだすあかるい長調がコントラストのテーマ。この〝野蛮さ〟が都会人を魅せる、か。作曲は1936年、ルイ・プリマ。1938年にベニー・グッドマン楽団の録音がヒット。ジャズがダンスと結びついていた〝スウィング〟時代。映画『スウィングガールズ』(2004)では女子高生たちの演奏が盛りあげる。

小沼純一
［音楽・文芸批評家］

音楽を中心にしながら、文学、映画など他分野と音とのかかわりを探る批評をおこなう。現在、早稲田大学文学学術院教授。批評的エッセイとして『本を弾く来るべき音楽のための読書ノート』『武満徹 逍遥』『音楽に自然を聴く』『リフレクションズ JAZZでスナップショット』ほか、創作に『sotto』『しっぽがない』『ふりかえる日、日めいのレッスン』ほか。編著に『武満徹エッセイ選』『ジョン・ケージ著作選』『柴田南雄著作集 I〜III』ほか。2015-6年にはシンガポール、ソウル、東京でおこなわれた国際交流基金主催のコンサート『村上春樹を「聴く」』の監修もおこなった。NHK Eテレ『schola(スコラ)坂本龍一 音楽の学校』(2010-2014)のゲスト講師としても出演。

イラストレーション：KAnaMi

Information

2025年・2026年に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

※各大会の内容は変更になる場合がございます。

研究大会

2025

10月 October

23日（木）・24日（金）

令和７年度 全日本音楽教育研究会
全国大会佐賀大会（総合大会）
第66回 九州音楽教育研究大会 佐賀県大会
第26回 佐賀県音楽教育研究大会 佐賀・小城・多久地区大会

佐賀市文化会館 他

〈大会研究主題〉
育てよう　音楽と豊かに関わる子ども
～音楽科及び芸術科音楽における
「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して～
https://saga-ken-on-ken.jimdosite.com/

［問い合わせ］
佐賀市立城北中学校 校長 末次知子
〒849-0921 佐賀県佐賀市高木瀬西三丁目１番50号
TEL 0952-30-9258
suetsugu-tomoko@education.saga.jp

11月 November

7日（金）

第67回 関東甲信越音楽教育研究会
埼玉大会（戸田大会）

戸田市文化会館 他

〈大会主題〉
アナログ×デジタルで進化（深化）する
音楽の授業における個別最適＆協働的な学び

［問い合わせ］
埼玉大学教育学部附属小学校 教諭 三橋博道
〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤6-9-44
TEL・FAX 048-833-6956
onkyouren@gmail.com

7日（金）

第73回 東北音楽教育研究大会 福島大会

ふくしん夢の音楽堂 他

〈大会主題〉
かがやく瞳・きらめく音・ときめく心を育む音楽の学びを求めて
～音楽科授業において「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するか～

［問い合わせ］
福島市立平野中学校 校長 佐藤裕子
〒960-0231 福島市飯坂町平野字舘ノ前3-3
TEL 024-542-3074／FAX 024-543-0652
head.hirano-j@fcs.ed.jp

14日（金）

第56回 中国・四国音楽教育研究大会 鳥取大会

とりぎん文化会館 他

〈大会主題〉
おんがくっていいな！
～つなげよう 拓こう 未来を 音の心で～

［問い合わせ］
鳥取市立桜ヶ丘中学校 教頭 山内かおり
〒680-0853 鳥取県鳥取市桜谷227
TEL 0857-22-8301／FAX 0857-22-8302
https://sites.google.com/g.torikyo.ed.jp/tori-musica2025

20日（木）・21日（金）

第19回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会
岐阜大会
第35回 岐阜県音楽教育研究大会

岐阜市民会館 他

〈大会主題〉
楽しさと確かさの中に美しさを求める子をめざして
～子どもの可能性を引き出す音楽科の授業～

［問い合わせ］
岐阜市立島小学校 校長 野原美登里
〒502-0911 岐阜県岐阜市北島7-6-12
TEL 058-231-2392／FAX 058-231-2356
https://qifuxianxiaozhongxuexiaoyinlekeyanjiubuhui0.webnode.jp/

12月 December

5日（金）

第67回 北海道音楽教育研究大会 札幌大会

札幌市教育文化会館 他

〈全道共通主題〉
音楽のよさを分かち合い　確かな力を育む音楽教育

［問い合わせ］
札幌市立光陽小学校 校長 鈴木秀和
〒001-0905 札幌市北区新琴似５条11丁目4-1
TEL 011-761-2521／FAX 011-761-9612
hidekazu.suzuki@sapporo-c.ed.jp

2026

10月 October

29日（木）・30日（金）

令和８年（2026年）度
全日本音楽教育研究会全国大会
（幼・小・中・高校部会大会）奈良大会
第68回近畿音楽教育研究大会 奈良大会

なら100年会館 他

〈大会研究主題〉
音楽で培おう シンの力

［問い合わせ］
斑鳩町立斑鳩南中学校 校長 上西秀勝
〒636-0133 奈良県生駒郡斑鳩町目安北3-1-77
TEL 0745-74-5800／FAX 0745-74-5978

教育芸術社ウェブサイトでは、
上記の研究大会やこの他のイベントなどの
情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

Spring Seminar

スプリングセミナー2026

― 新作合唱曲による公開講座 ―

コンクール自由曲向けの新曲発表会「スプリングセミナー2026」を開催いたします。
同声・女声・混声の作品を作曲者、司会者、合唱団と学びます。
※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

- **日　程**：2026年３月27日（金）
- **会　場**：東京音楽大学TCMホール
  （中目黒・代官山キャンパス）
- **司　会**：藤原規生
- **作曲家**：［同声合唱］森山至貴、横山潤子
  ［女声合唱］アベタカヒロ、瑞慶覧尚子
  ［混声合唱］森田花央里、信長貴富
- **合唱団**：八千代少年少女合唱団
  （指揮：長岡亜里奈）
  おうたや
  （指揮：田中エミ）
  Youth Choir Aldebaran（ユースクワイア アルデバラン）
  （指揮：佐藤洋人）
- セミナー終了後、
  合唱ワークショップを行う予定です。
- **お問い合わせ：**
  株式会社教育芸術社
  スプリングセミナー実行委員会
  TEL 03-3957-1168
  FAX 03-3957-1740
  https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/

最新情報は弊社ウェブサイトで
随時公開いたします。
https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/

最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。
https://fb.me/kgspringseminar/

内容は予告なしに変更となる場合がございます。

編集後記

吹き抜ける涼風を頬に受けると、秋の訪れを感じます。しかし残暑も続く日々、今号ではまだまだ夏真っ盛りとも言えるような、熱い思いをもつ方々への取材が実現しました。

巻頭インタビューにご登場いただいたダイアモンド✡ユカイさんは等身大の気さくなお人柄で、「やっぱり音楽は楽しくないとね」と笑う姿には、初心に立ち返る気持ちになりました。

レポート②では、ジャズピアニストの木原健太郎さんの思いから始まった子どもたちのためのプロジェクトをご紹介しています。釧路市立湖畔小学校の児童が真剣に制作した卒業ソングのお披露目は会場が一体となり、まるでライブのような盛り上がりを見せました。参考楽譜には、木原さんが約10年前に同市の青陵中学校で生徒たちと制作した楽曲を掲載しています。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
たかなかな

写真撮影
島崎信一（STUDIO S+PLUS）

写真提供
釧路市立湖畔小学校
ダイアモンド✡ユカイ
藤原道山

イラストレーション
KAnaMi

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン

発行者　株式会社 教育芸術社
（代表者 市川かおり）
〒171-0051　東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175（代）
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
JASRAC 出 2506374-501
Ⓒ2025 by KYOGEI Music Publishers. ⓟ-25
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

＊ヴァン＝“vent” はフランス語で「風」。新しい音楽教育の地平を切り開いていく願いを込めています。

LOVE THE ORIGINAL
楽譜のコピーはやめましょう

詳細はこちら

Recommend

New Song ライブラリー【同声編⑤】
小学生のためのクラス合唱新曲集　ぼくの風船

○入学式から卒業式までさまざまな場面で歌える魅力的な22曲。作者によるメッセージを全曲掲載！
●定価1,650円（本体1,500円+税10%）／B5判／88ページ
●ISBN978-4-86779-002-1

準拠CD（別売り）
●価格3,080円（本体2,800円+税10%）／1枚
●GES-16004

New Song ライブラリー【混声編④】
クラス合唱新曲集　心の声

○授業や校内合唱コンクール、行事に…レパートリーが広がるシリーズ第4弾！
●定価1,760円（本体1,600円+税10%）／B5判／104ページ
●ISBN978-4-86779-065-6

準拠CD（別売り）
●価格3,080円（本体2,800円+税10%）／1枚
●GES-16058

Chorus ONTA Vol.29

○授業に、音楽会に、コンクールに、さまざまな合唱活動で高い評価をいただいている混声合唱のためのパート練習用CD第29弾！
○収録曲：道を歩けば／瞳をとじて見えるもの／14 -fourteen-／懐かしい未来／タイムリーパー／桜、いってきます／虹／Chessboard ／ことばを追い越して／前に
●価格13,200円（本体12,000円+税10%）／4枚組
●KGO-1209～1212

増補改訂版 音楽史を学ぶ
古代ギリシアから現代まで

久保田慶一 編著
○高等学校の鑑賞用副教材や大学などのテキストに最適な音楽史の新刊です！増補改訂版では、現行本では十分な記述がなかったアメリカ音楽史を大幅に加筆し、さらに2019年末頃からはじまったコロナ・パンデミックなど近年の状況についての説明も追加しました。
●定価990円（本体900円+税10%）／B5判／216ページ、カラー口絵 4ページ
●ISBN978-4-86779-067-0

弓削田健介 ミニアルバム
フェニックス ―復活と再生の歌―

○弓削田健介氏が2024年に能登や長岡の子どもたちと行った「歌づくりプロジェクト」。プロジェクトにより生まれた、弓削田氏と子どもたちの想いが詰まった3つの歌を1冊にまとめました。（編曲を含む全4曲）
○掲載曲：ゆめはなび（斉唱）／HANABI（同声二部）／フェニックス（同声二部、混声三部）
●定価：1,320円（本体1,200円+税10%）／B5判／28ページ
●ISBN978-4-86779-126-4

小学校音楽科での実践事例集
わらべうたと遊びで学ぶ音楽

○わらべうたを歌いながら遊ぶ活動を通して、音楽の基礎的な力の育成を目指します。
○全13曲を掲載。全曲に遊び方が分かる動画付き！
●定価1,650円（本体1,500円+税10%）／A4判／32ページ
●ISBN978-4-86779-128-8

小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ
教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

はじめました！
教育芸術社 LINE公式アカウント
ぜひお友だち登録してください♪